

I 調査結果の概要

1 世帯における食品使用量、食品ロス量及び食品ロス率

世帯食^(注1)における平成19年度の1人1日当たりの食品使用量は1,116.5gであった。

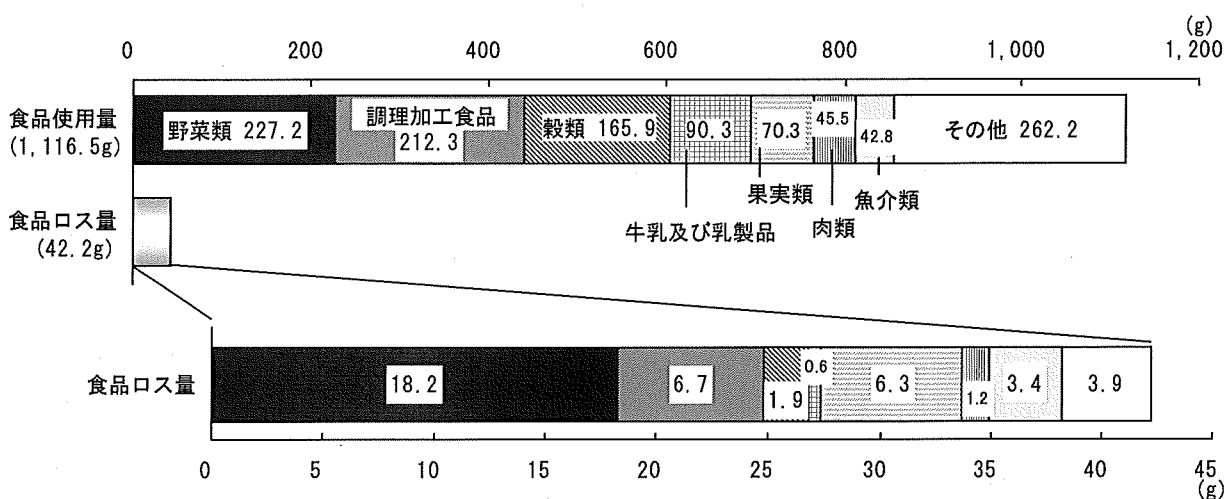
これを主な食品類別にみると、「野菜類」が227.2g（全体の20.4%）と最も多く、次いで「調理加工食品」が212.3g（同19.0%）、「穀類」が165.9g（同14.9%）となっている。

また、世帯食における1人1日当たりの食品ロス量^(注2)は42.2gであった。

これを主な食品類別にみると、「野菜類」が18.2g（全体の43.2%）と最も多く、次いで「調理加工食品」が6.7g（同15.8%）、「果実類」が6.3g（同15.0%）となっている。

この結果、世帯における平成19年度の食品ロス率は3.8%となった。

図1 主な食品類別の食品使用量及び食品ロス量（世帯食1人1日当たり）



注：表示単位未満の数値から算出しているため、統計表の数値による算出と一致しないことがある。（以下同じ。）

(注1) 世帯食とは、家庭において調理・食事したもので、外食、学校給食等を除いたものをいう。

(注2) 食品ロスとは、食品使用量のうち食品の廃棄や食べ残されたものをいう。

$$\text{食品ロス率 (\%)} = \frac{\text{食品ロス量}}{\text{食品使用量}} \times 100$$

(1) 世帯員構成別の食品使用量及び食品使用量割合

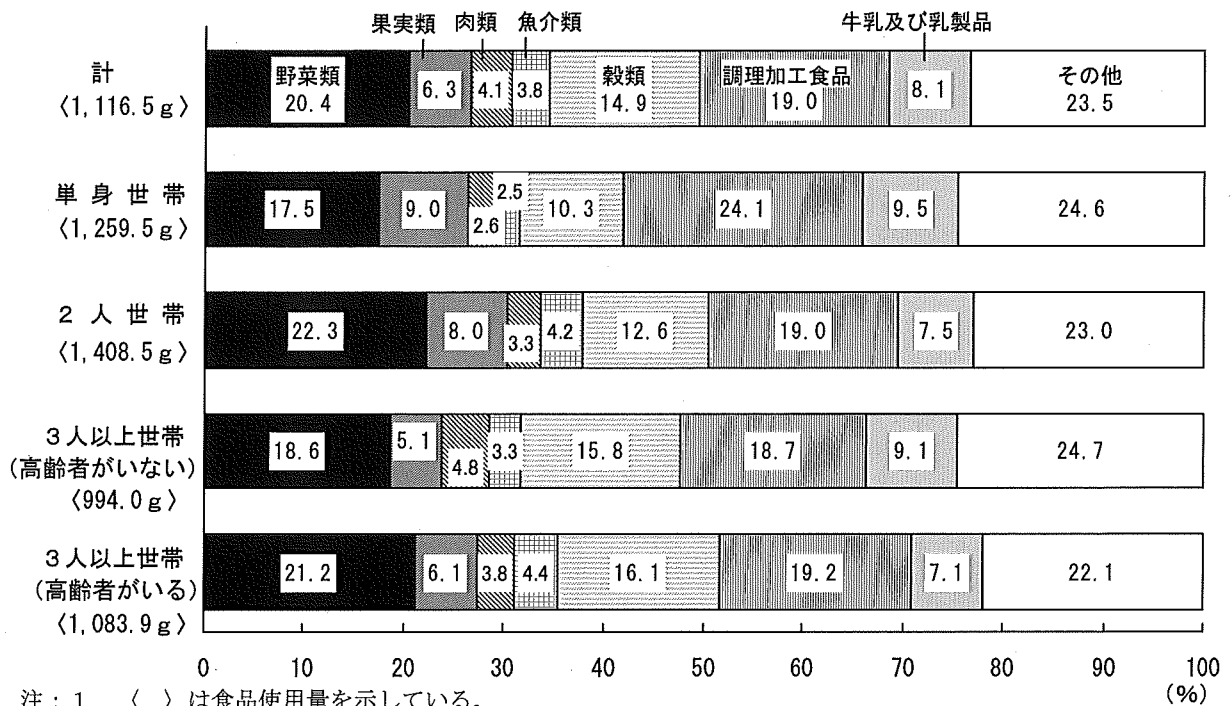
世帯食における1人1日当たりの食品使用量を世帯員構成別にみると、「2人世帯」が1,408.5gと最も多く、次いで「単身世帯」が1,259.5g、「高齢者がいる3人以上世帯」が1,083.9g、「高齢者がいない3人以上世帯」が994.0gとなっている。

また、主な食品類別に食品使用量割合をみると、単身世帯では「調理加工食品」、

2人世帯では「野菜類」、3人以上世帯では「穀類」が他の世帯員構成に比べそれぞれ高くなっている。

単身世帯では、果実類、牛乳及び乳製品、調理加工食品の割合が他の世帯員構成より比較的高く、調理をあまり必要としない食品を摂る傾向が伺える。

図2 世帯員構成別の食品使用量及び食品使用量割合（世帯食1人1日当たり）

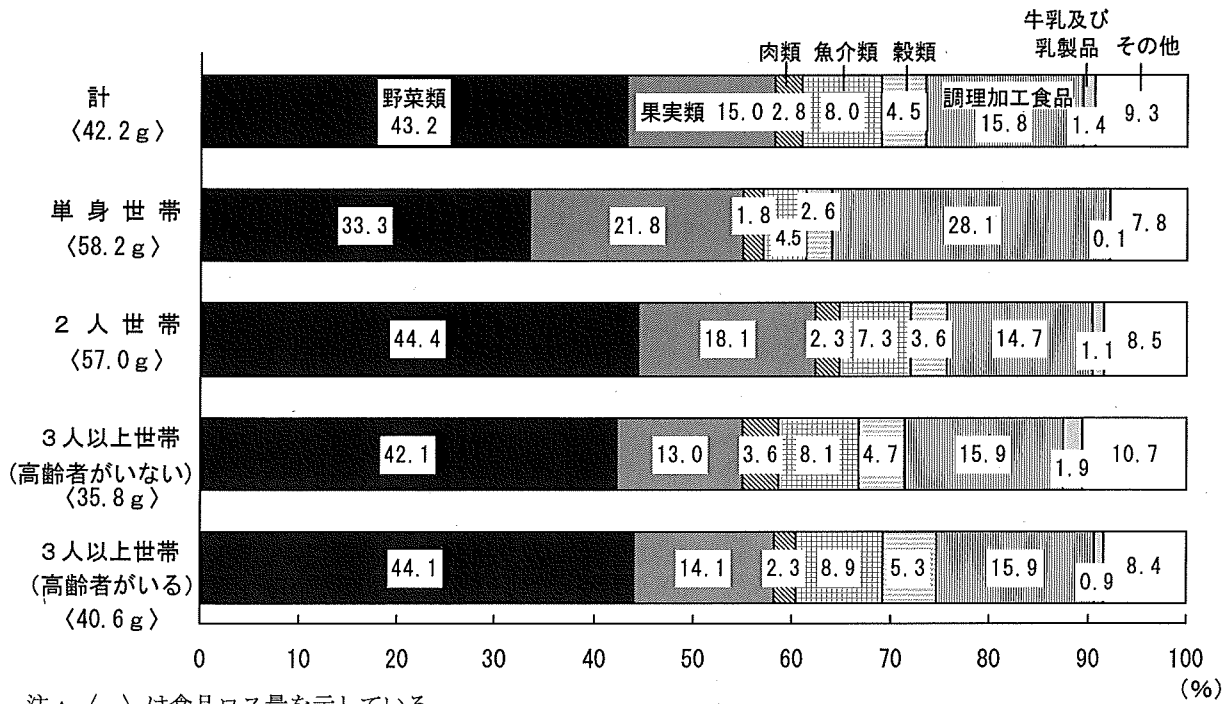


(2) 世帯員構成別の食品ロス量及び食品ロス量割合

世帯食における1人1日当たりの食品ロス量を世帯員構成別にみると、「単身世帯」が58.2gと最も多く、次いで「2人世帯」が57.0g、「高齡者がいる3人以上世帯」が40.6g、「高齡者がいない3人以上世帯」が35.8gとなっている。

また、主な食品類別に食品ロス量割合をみると、単身世帯では「調理加工食品」及び「果実類」、2人世帯では「野菜類」、3人以上世帯では「魚介類」が他の世帯員構成に比べて高くなっている。

図3 世帯員構成別の食品ロス量及び食品ロス量割合（世帯食1人1日当たり）



(3) 食品ロス率

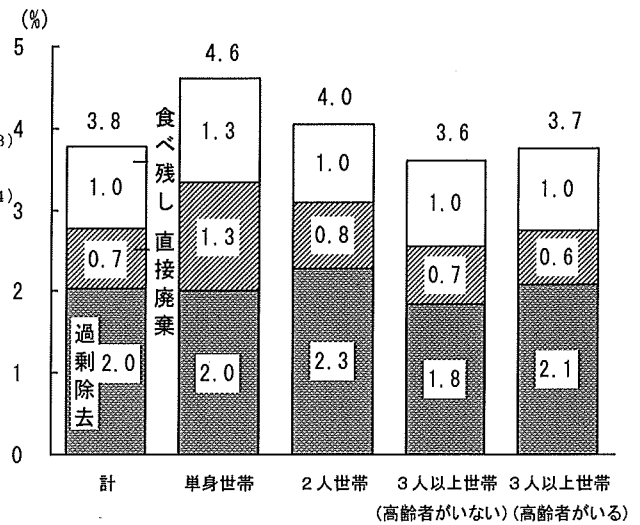
ア 世帯員構成別

世帯食における食品ロス率は3.8%であった。

これを要因別にみると「過剰除去」^(注3)が2.0%と「食べ残し」や「直接廃棄」^(注4)を大きく上回っている。

また、世帯員構成別にみると、「単身世帯」が4.6%と最も高く、次いで「2人世帯」が4.0%となっている。

図4 世帯員構成別の食品ロス率



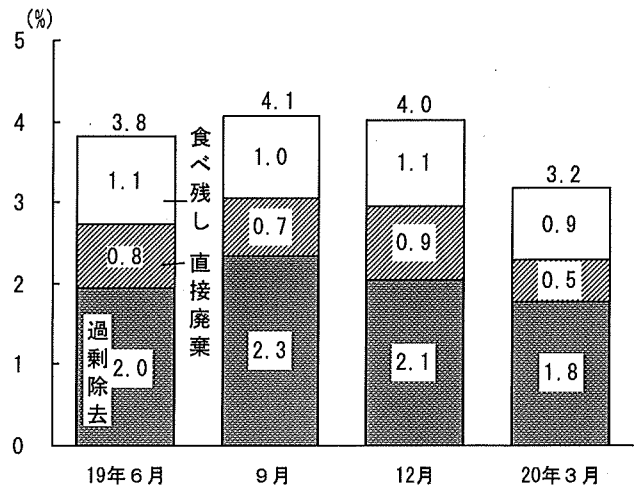
(注3) 過剰除去とは、だいこんの皮の厚むきなど、不可食（食べられない）部分を除去する際に過剰に除去した可食（食べられる）部分をいう。

(注4) 直接廃棄とは、賞味期限切れ等で、食事において料理・食品として提供・使用されずに廃棄したものをいう。

イ 調査時期別

調査時期別の食品ロス率をみると、「9月」が4.1%と最も高く、次いで「12月」が4.0%となっている。

図5 調査時期別の食品ロス率

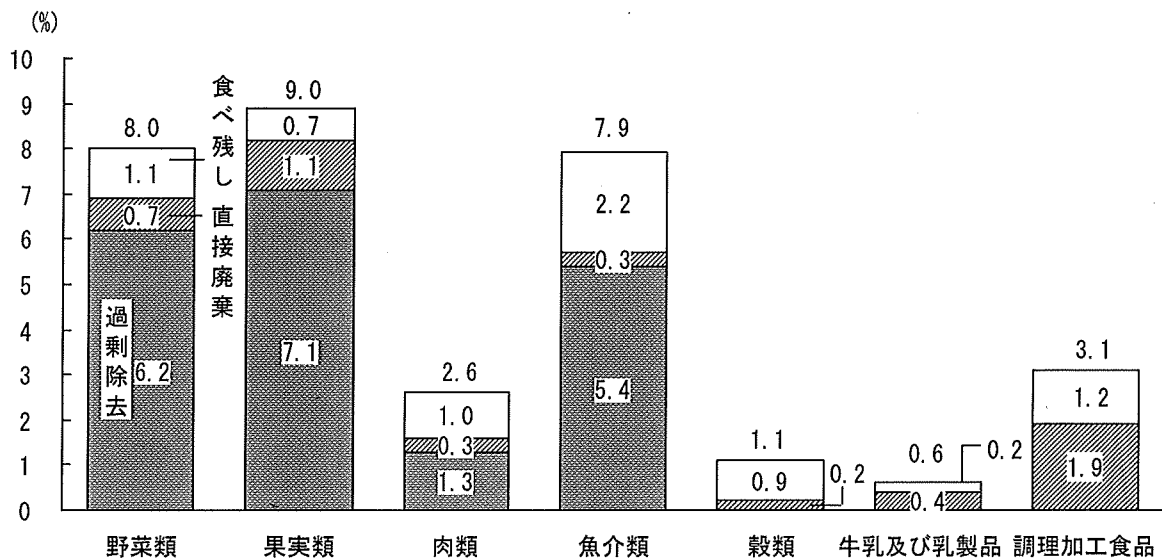


ウ 主な食品類別

主な食品類別の食品ロス率をみると、「果実類」が9.0%と最も高く、次いで「野菜類」が8.0%、「魚介類」が7.9%となっており、過剰除去によるロス率の高い生鮮食品で高くなっている。

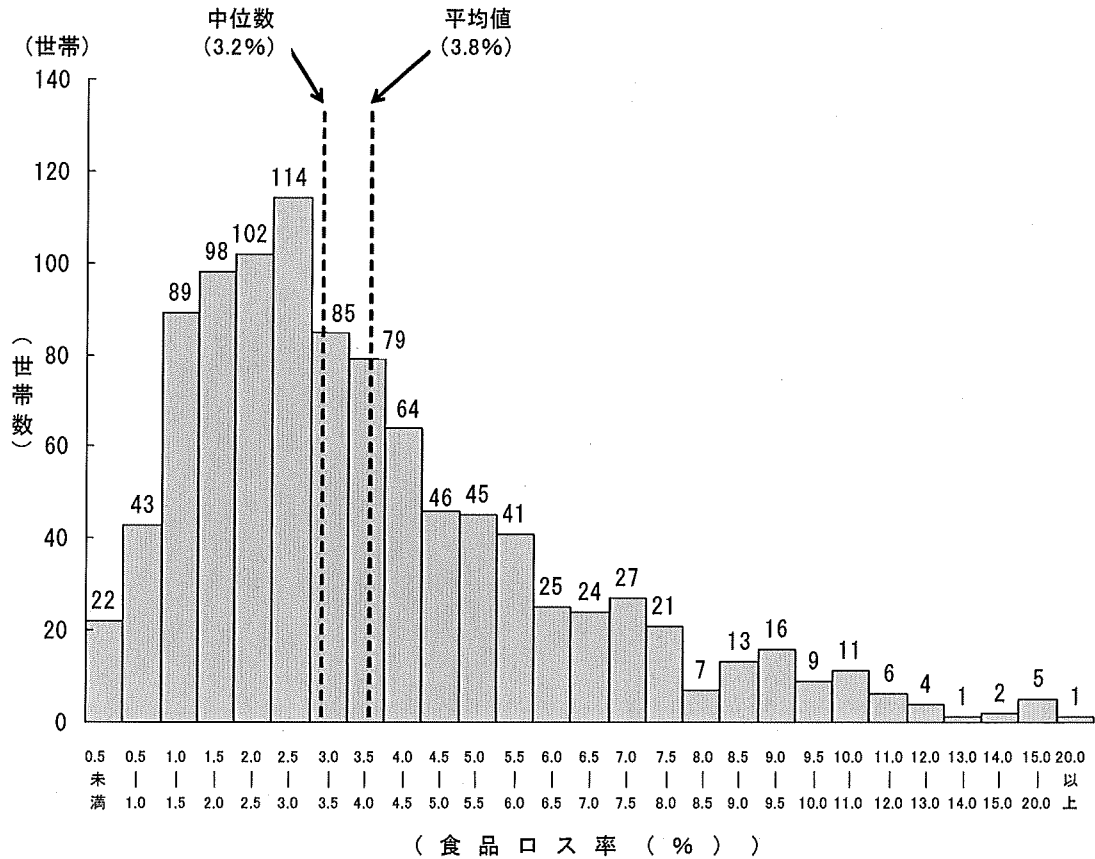
また、「調理加工食品」では直接廃棄 (1.9%) が、「魚介類」では食べ残し (2.2%) が他の食品に比べて高くなっている。

図6 主な食品類別の食品ロス率



参考 本年度の食品ロス率別の世帯分布

本年度の世帯食における食品ロス率は3.8%であるが、食品ロス率別に調査世帯(1,000世帯)の分布をみると、全体の約6割がこれを下回る結果となっており、中位(500番目と501番目の平均値)の世帯における食品ロス率は3.2%となっている。

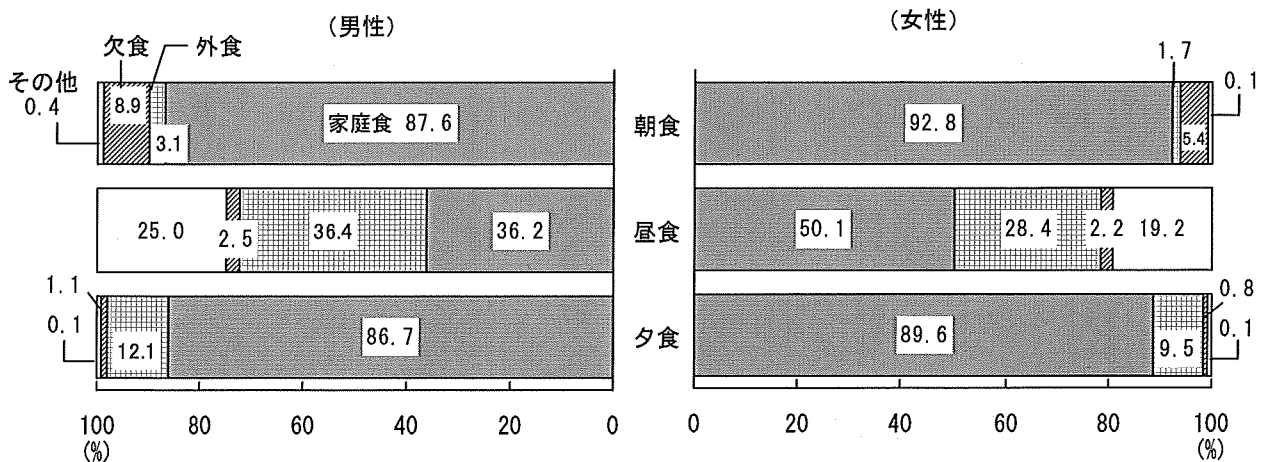


2 世帯における食事の状況

(1) 世帯員の食事状況

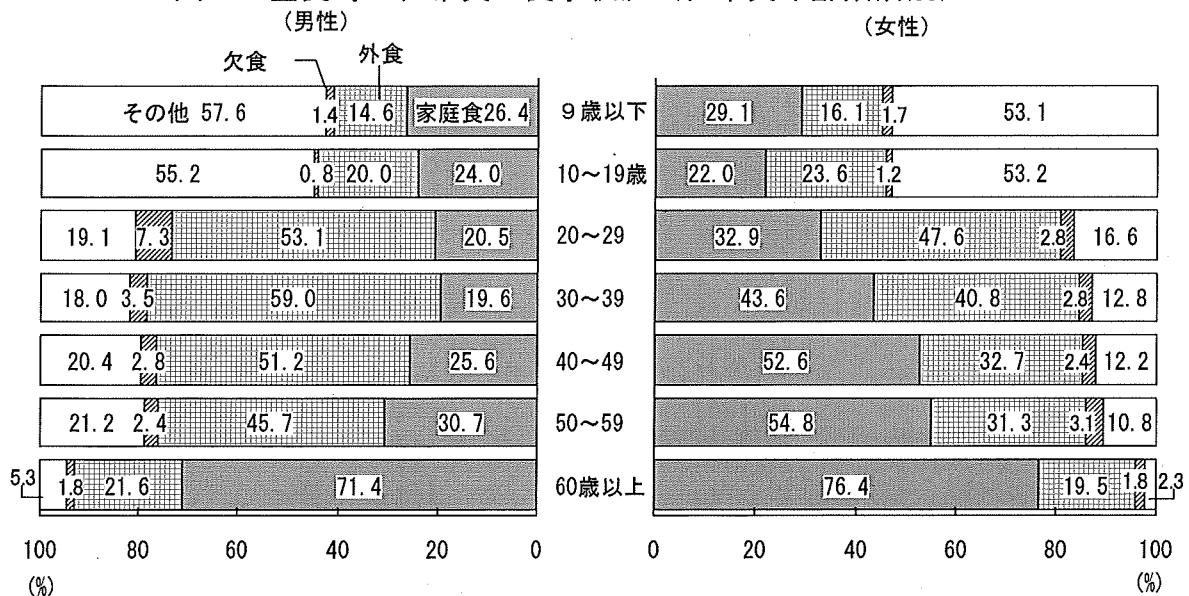
世帯員の性別ごとに調査期間1週間における食事状況をみると、朝食及び夕食は「家庭食」の割合が男女とも約9割となっている。また、昼食では朝食や夕食に比べて「外食」や「その他」（給食、自家製弁当）の割合が高く、特に、男性の「外食」は、36.4%と「家庭食」（36.2%）と同程度の割合となっている。

図7 世帯員の食事状況



さらに昼食を世帯員の年齢階層別にみると、19歳までは、男女ともに「その他」（給食、自家製弁当）が5～6割を占めている。また、20歳～59歳では男性は約半数が「外食」となっている。一方、女性は20～29歳では「外食」が約半数を占めているものの、年齢階層が上がるごとに「家庭食」の割合が高くなっており、40～49歳以上は「家庭食」の割合が半数以上となっている。

図8 昼食時の世帯員の食事状況（世帯員年齢階層別）



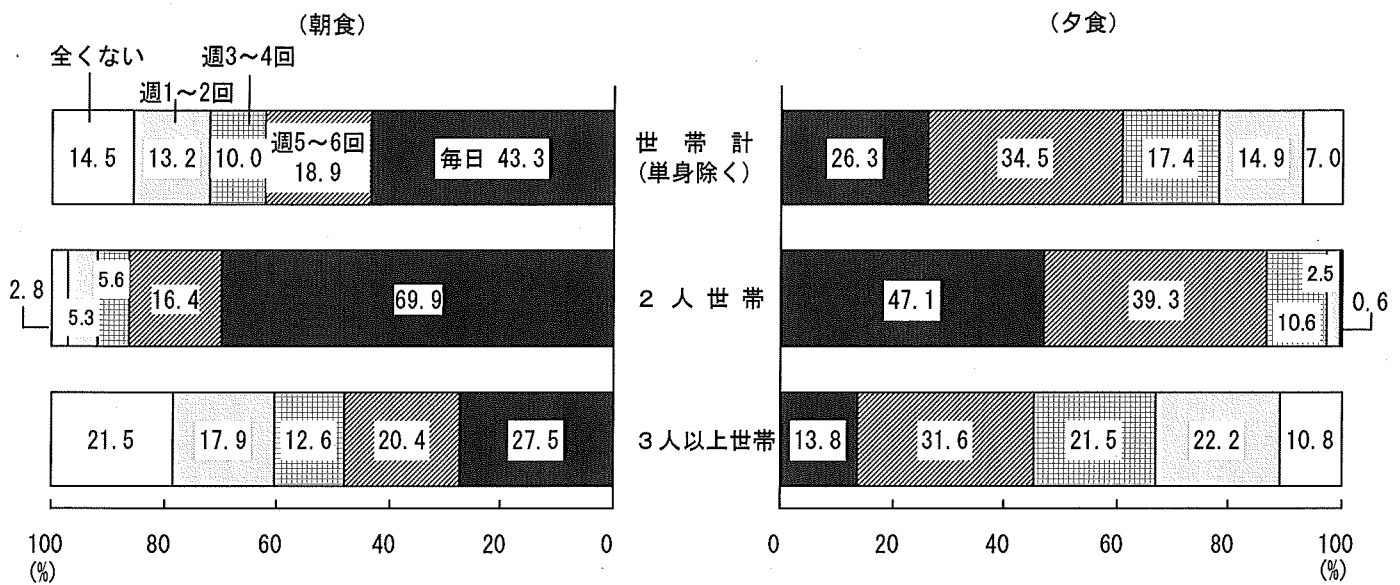
(2) 世帯員全員での食事状況

ア 世帯員構成別（2人以上世帯）

単身を除く世帯において、調査期間1週間のうち、世帯員全員が自宅で一緒に食事をした回数をみると、朝食を「週5回以上」全員で摂った世帯の割合は62.2%、全員で食事を摂ることが「全くない」世帯は14.5%であった。また、夕食では、「週5回以上」の世帯は60.8%、「全くない」世帯は7.0%であった。

このうち、3人以上世帯をみると、朝食では、「週5回以上」の世帯は47.9%、「全くない」世帯は21.5%で、夕食では、「週5回以上」の世帯は45.4%、「全くない」世帯は10.8%となっており、生活サイクルの違いなどから一緒に食事を摂る機会は少なくなっている。

図9 世帯員全員で食事した割合（2人以上世帯）



イ 世代構成別（2世代以上世帯）

単身及び第1世代を除く世代構成別にみると、高齢者も14歳以下もいない2世代世帯及び3世代以上世帯では、朝食を全員で摂る回数が「週2回以下」の世帯がともに45.2%と約半数を占めている。また、高齢者がいる2世代世帯では、朝食、夕食ともに、「週5回以上」全員で摂る世帯が約6割となっている。